

《書評》

Matthew Sturgis,

Oscar: A Life

London: Apollo, 2018.

河内 恵子

2018年に出版されたM. Sturgisの*Oscar: A Life*はきわめて面白い物語だ。まず構成をみてみよう。720ページの本編はProemから始まるが、ここで読者は一気にスタージスの展開するオスカー・ワイルドの人生へと引き込まれる。1864年12月17日、ダブリンの人びとの大きな関心を引きつけた裁判の判決が下った。Mary Traversという若い女性が眼科と耳鼻科の名医の夫人、Lady Wildeを名誉毀損で訴えたこの裁判の詳細がまずは巧みに語られる。Sir William Wildeの患者であったトラヴァース嬢が医師によって性的に暴行されたと訴えたスキャンダルは医師の妻との戦いという局面で終焉を迎えるのだが、この間の一連の事情が詳しく描写され、それと同時にワイルド夫妻の在り方が示唆される。読者は裁判当時10歳であったオスカー・ワイルドの人生の物語の面白さを否応なく期待してしまう。

最後の*L'Envoi*でワイルドの死後の事情が簡単に語られるまで、11章にわたってワイルドの生の軌跡が丹念に辿られる。各章にはワイルドの作品のタイトルが付けられ、短い章で3セクション、長い章は8セクションに分けられている。全53のセクションにも簡潔なタイトルが付され、それとともにワイルド作品から引用された表現や彼自身が発した言葉が添えられている。

第1章*The Star Child 1854-1874 Age 1-20*ではProemで紹介された裁判の10年前のワイルドの誕生から彼がオックスフォード大学に入学するまでの時代が描かれている。前述した裁判についての詳しい説明はもちろんだ

が、兄 William との関係、古典文学に関心を抱くようになったきっかけなどこれまでの資料では詳しく語られなかった事実が明らかにされる。とりわけ、Trinity College における二人の教師、Robert Yelverton Tyrrell と John Pentland Mahaffy がそれぞれの学問によってワイルドに刺激を与えた道程や Trinity College 自体が talk を重要視していた点など興味深い指摘がある。第2章 *The Nightingale and the Rose* 1874-1878 Age 20-24 で描出されるのはワイルドのオックスフォード大学時代であるが、友人たちとの関係、とりわけ、Frank Miles との出会いや交際の様子、Freemasonry との関わりの部分、そして恋人(?) Florence Balcombe との別れなどが印象に残る。第3章 *The Happy Prince* 1879-1881 Age 24-27 はオックスフォード大学を卒業してからアメリカ講演旅行に旅立つまでの、何者かになろうとするワイルドのロンドンでの生動感を伝えていて興味深い。女優たち、ラファエロ前派の画家たち、社交界の有名人たち、作家たち、ジャーナリストたち——自らのキャリア形成を模索しながら talk という武器で多くの人物たちと接触し続けるワイルドを著者は enthusiast と称する。その熱意 (enthusiasm) ゆえに距離を置かれたり嫌悪されたりすることもあるのだが、若き日のワイルドのエネルギーは魅力的な磁場をロンドンに形成している。

第4章 *The Remarkable Rocket* 1882 Age 27-28 は一年にわたるワイルドのアメリカ講演を講演スケジュール、講演内容、聴衆の反応とジャーナリズムの対応、さまざまな社交体験、病気、賭け事、イギリス在住の母親からの連絡等、多岐にわたる角度から立体的に浮かび上がらせる。しかし、ここで語られるエピソードはスタージス自身が参考文献にあげている Matthew Hofer and Gary Scharnhorst, eds. *Oscar Wilde in America: The Interviews* (2010) と David M. Friedman, *Wilde in America: Oscar Wilde and the Invention of Modern Celebrity* (2014) と重なる部分が多い。第5章 *The Devoted Friend* 1883-1888 Age 28-34 は Constance との結婚、二人の息子の誕生、作家そして編集者としての仕事という人生における大きな出来事、さらにこれらと並列して同性愛者ワイルドの出現とが詳しく描かれる。生涯の友人となる Robert Ross との出逢いは周知の事実だが、その他の多くの知的で美しい若者たちとの交流については評者が新しく知りえた情報もあった。ロスをはじめ、これらの青年たちのなかにはコンスタンスと知り

合う者もいたのだが、その交流の具体的な輪郭にはわからない部分も多い。次章 *The Young King* 1889-1892 Age 34-37 はワイルドの成功と破滅への道をたたみかけるように映し出してスリリングだ。よく知られているエピソードが次から次へと語られるが運命の人物 Alfred Douglas との出会いと恋はやはり面白い。長く求めていた成功を手に入れるワイルドが自ら穿った深い穴の魅力に落ち込んでいく過程は、図らずも、ワイルドの作品世界を強く示唆する。

第7章 *The Selfish Giant* 1892-1894 Age 37-40 は「ロンドンとボウジー(アルフレッド・ダグラス)とコマーシャルセックスが提供する乱行」がワイルドを魅了し続けていたことが彼の悲劇の始まりだと示唆する。知的で美しい青年たちではなく、美しく性的な魅力に富む性を売る男たちとの時間に耽溺しながら、きわめて完成度の高い喜劇を執筆するワイルドの危うい人生が伝えられる。また、徐々に悪化するダグラスとワイルドとの関係、その背後に存在するダグラスの父親 Marquess of Queensberry の企みと、よく知られた破滅への道が手際よく語られる。*The House of Judgement* と題された第8章は1895年、ワイルドが40歳にして人生最高の名声を享受していた華やかな日々と、クイーンズベリー侯爵との対立に始まる一連の裁判そして有罪判決へという劇的な一年が、関係者たちの具体的な発言を多用して表現している。第9章 *In Carcere e Vinculis* 1895-1897 Age 40-42 ではワイルドが自ら記した *De Profundis* やこれまでに出版されている伝記が伝える獄中生活を取り扱っている。新しい情報をもっとも少ないのがこの章であるが、友人 Robert Sherard がワイルドとコンスタンスの関係を修復しようと努力する過程が丁寧に描かれ、その友情とコンスタンスの反応がさまざまな書簡を媒介にして出現する。

出獄後のワイルドを、すなわち晩年の彼を描く最後の二つの章には、誤解を怖れずに言うならば、リズムカルな鼓動が響く。第10章 *The Fisherman and His Soul* Age 42-44 は獄中での体験を文学に昇華させようとする生き生きとした作家ワイルドを捉える。彼の解き放たれた精神はイギリスの悪しき刑務所システムを訴える書簡や罪を犯した人間の孤独と宿命をうたう長編の詩を生むが、計画していたとおりの創作活動が完全なかたちで再開されることはなかった。コンスタンスや息子たちとの接触を

渴望しながらも、アルフレッド・ダグラスとの交流を断てないワイルドの弱さは「自己憐憫という快樂に慰めを求めた」ことにあるという指摘はおそらくは正しい。パリでの最後の日々を描く第11章 *The Teacher of Wisdom 1898-1900 Age 44-46* は創作の約束と金銭の無心という二つのアスペクトで従来は語られてきたワイルドの晩年が、実は奇妙に明るいものであったことを、少なくとも、そのような時があったことを示して興味深い。仲違いをした時期はあったものの献身的にワイルドを支えるロバート・ロスを筆頭に友人たちや知り合いたちが入れ代わり立ち代わり彼の最後の日々を彩るのだ。その様子が、ドレフュス事件で揺れるパリを背景に克明に描かれる。この事件にワイルド自身が如何に関わっていたか、はもちろんであるが、付かず離れず続くダグラスとの関係、パリで出会う美しい青年たちとの交流、とりわけ、ロスやダグラスをも魅了した Maurice Gilbert との繋がりは、きわめて具体的に述べられていて読者の心を捉える。

妻コンスタンスの死、宿敵クイーンズベリー侯爵の死、そして時代の寵児 Aubrey Beardsley の死。さまざまな死が語られる。そしてワイルドの死も。生涯の友人であった More Adey は「苦しそうだったけれど、同時に大声で笑ったり、医師たちや自分自身を嘲笑するたくさんのお話をしてくれた」と死を間近にしたワイルドの様子を記している。スタージスは訪れる友人たちを最期まで楽しませ続けたワイルドの哀しい姿を読者たちに紹介する。

この後138ページにわたって記された巻末注釈は、著者が、これまでの研究書で扱われてこなかった書簡、新聞記事、回顧録を細かく読み込んでいることを示している。しかし、Kate Hext が *TLS* (2018年11月20日) で指摘しているように、著書資料の多くは20世紀の前半に出版されたものがほとんどで新しい資料がきわめて少ない。また、スタージスの参考文献表には20世紀後半以降に執筆された part-biography (ワイルドの人生の一部分に特化して執筆された伝記) はほとんど含まれていない。ヘクストと同様に評者も Joseph Bristow や Michèle Mendelssohn の作品をスタージスがどのように理解しているのかと疑問に思った。スタージスは本書の preface と acknowledgements の部分で伝統的なワイルドの伝記、Richard Ellmann, *Oscar Wilde* (1987) 以降の研究の広がりや資料の発見に触れた後、出会ったワイルド研究者として Karl Beckson, John Stokes, Joel Kaplan 等の名前は

列挙しているのだが、彼らの研究にどのような影響を受けたのかについては何も記していない(また、もう一つ不満な点はラファエロ前派の画家、Ford Madox Brown を Ford Madox Ford と誤記していることである)。

エルマンがその金字塔的伝記において文学的アプローチをとった伝記作家であるならば「(自分は)歴史家の眼でワイルドと彼が生きた時代と事実」を見つめワイルド自身が経験した人生そのものを捉えたいとスタージスは述べていた。確かにオスカー・ワイルドが生きた19世紀後半のダブリン、オックスフォード、ロンドン、そしてパリとそれらの空間を舞台とする事象が巧みに描かれていた。時代と空間が生み出すダイナミズムの間で危うい均衡を保とうとするワイルドの姿は明度をもって伝えられていた。しかし、この著書の魅力はその語りの巧みさにある。事実を文学的に伝える文章のリズムと表現の面白さがこの著書の力なのだ。スタージスの文学的表現が歴史家としてのアプローチを魅力的なものにしている。評者がこの伝記を「新しい物語」と称したい理由はそこにある。*Oscar: A Life*は、読ませる伝記物語である。